

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

■ 事例報告

西尾章治郎（大阪大学学長）

大阪大学の高大接続と入試改革について説明させていただきます。まず、大阪大学の概要を紹介します。大阪大学は江戸後期の蘭方医・緒方洪庵が大坂・船場に開いた「適塾」及びさらに遡って江戸中期に大坂の五人の豪商によって設立された「懐徳堂」を源流としています。適塾の自由闊達な学風と、大坂町人の学問への情熱を継承し、1931年に帝国大学の一つとして創設されました。創設に際しては、地元大阪の産業界、財界等の支援と大阪府民・市民の熱意によって開学に至った背景があります。このような他に類を見ない設立の経緯は、地元根付いた教育・研究・社会との連携、そして地元とともに世界に羽ばたくという本学のモットー「地域に生き世界に伸びる」という言葉に表れています。



篤志家の寄付により創設された外国語教育研究の西の雄である大阪外国語大学と2007年に統合し、新たな大阪大学が誕生しました。現在は、11学部、16研究科、5附置研究所などを擁する我が国屈指の研究型総合大学に発展しています。国立の総合大学では唯一「外国語学部」を持つほか、科学と技術の融合による先端的研究を行う「基礎工学部」や、学際性を打ち出した「人間科学部」など、既存の学問分野を超えた先進的な組織を設置してきました。学部学生数は1万5479人と、国立大学では最大規模であり、さらに国立七大学における女子学生の比率や留学生数もトップクラスです。

本学は、高度な専門知識に加え、幅広い見識に基づく豊かな社会的判断力としての「教養」、異なる文化的背景をもつ人と対話できる「国際性」、自由なイマジネーションと横断的な構想力としての「デザイン力」の獲得を教育理念としています。1994年の教養部廃止以降、全国に先駆けた学際融合的な教育の実績は、博士課程教育リーディングプログラム等の重要事業の採択も得て、「教育の阪大」との評価を確立してきました。本年7月には、新たな知の開拓と学問の創生により「高度汎用力」を養うCOデザインセンターを設置しました。この「高度汎用力」こそが、今日の地球規模での諸課題の解決に不可欠であると確信しております。

2021年の本学の創立90周年までの6年間で「進化の期」と位置付け、たゆまぬ自己変革の指針として「OUビジョン2021」を策定しました。イノベーションを阻害する様々な「壁」を取り払い、大学の知を広く世のため、人類社会の幸福のために開放することを基軸に、エデュケーション、リサーチ、イノベーション、コミュニティ及びガバナンスに関して、五つのオープンな柱を展開していきます。「オープンエデュケーション」においては、大学を「知の社交空間」として広く開放し新たな学びの場を実現するとともに、専門知と社会の「新たな統合」を生み出します。

それでは、大阪大学の高大接続の取り組みについて紹介します。初めに、本学の高大接続に対するスタンスをお話しておきます。大阪大学も高大接続改革は単なる入試改革ではないと考えています。これからの社会に必要な人材を輩出するための教育改革としてこれをとらえ、日本をリードする大学の一つとして積極的に取り組み、その責任を果たしていきます。

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

具体的な取り組みを紹介します。本学では従来から、高校生との合同発表会の開催、公開授業の実施、本学教員の高校への派遣など様々な取り組みを積極的に行ってきました。例えば、高校生を対象とした取り組みとしてSEEDS（シーズ）を行っています。SEEDSは世界最先端の科学技術にいち早く触れてみたいという意欲的な高校生向けの教育プログラムです。高校1、2年生を対象に昨年8月から開始し、137人が受講してくれました。今年2月まで原則土曜日に授業や研究活動を行ってきました。今年4月からは、より深く研究したい高校生30人が研究と論文作成に取り組んでいます。なぜSEEDSを行っているのか。それは、大学で研究をしていくためには、自ら課題を設定し、あらかじめ決まった正解のない問題にじっくり取り組むことができる力が必要だからです。そのような体験を高校生のうちにするすることで、本当に優秀な研究者になってもらいたいと考えています。このプログラムにおいて、実際の研究を直接体感し、お互いに刺激し合うことで、高校での学習や将来の研究活動に対する意欲が高まってきたとの声も聞かれます。有望な研究者を高校と大阪大学が一緒になって育成していく。これは学術の中心たる大学をきっちりと盛り上げていく上でも大事なことでありと考えています。

また、大学に限らず、高校教育でもアクティブラーニングや探究的学習の導入が重要な目標となっています。探究的学習とは、課題を自ら見つけ、情報を集め、新たな発見や課題の解決を行う、研究者の素養にもつながる学びの活動です。文部科学省でも、高校の数学・理科にわたる探究的科目の新設について検討が行われていると聞いています。そこで高校の教員の方々にも、探究的学習の指導方法を身に付けてもらえれば、高大接続はよりスムーズに進むと考えています。大阪大学では、昨年度より高校の教員向けにセミナーを開催し、文系・理系を問わず、思考力・判断力を育成し、研究者の基盤をつくる教育の実現を支援しています。今年8月には、50人を超える高校教員の方々に参加し、熱い議論が展開されました。

次に、入試改革の取り組みを紹介します。本学では学部入学のための入試において、9種類の入試の方式をこれまで導入してきました。このうちのいくつかは、「世界適塾入試」に収斂させます。それ以外の特別な入試方式は、主に帰国生や海外留学生を入学対象としていきます。キャンパスの多様化のための取り組みです。冒頭にご紹介したオープンエデュケーションを実現するための取り組みであるとも言えます。留学生数は全国では2011年から2013年まで減少傾向ですが、大阪大学で学ぶ留学生数は2007年以降、一貫して増加しています。また、留学生の出身地域の分布については、アジアからの留学生が最も多くなっていますが、ヨーロッパ、南北アメリカ、中近東などからも優秀な学生が集まっています。

続いて、「世界適塾入試」と称している、平成29年度入試より始める多面的・総合的な入試の取り組みを紹介します。大阪大学では、すべての学部でAO入試、推薦入試の形で多面的・総合的に評価し選抜する入試を導入します。それに伴い、これまで行っていた一般入試後期日程の募集を停止し、その定員を事実上この入試に振り替えます。この方式で入学する定員は270人となり、これは全入学定員の約8%になります。なぜ、これだけの定員に、多面的・総合的な入試を振り分けるのか。「世界適塾入試」では、将来のグローバルリーダーとなる意欲的な人やグローバル社会の中で活躍できる人材を求めています。この入試により入学した意欲的な学生が大学の内外に影響を与えてほしいという我々の心からの願いをこめて、定員の約1割を募集することとしました。

それではなぜ、本学は多面的・総合的な入試を取り入れることにしたのか。これには、3つのねらいがあります。1つ目は、社会の変化に伴い、教育の目標が変化しているためです。真似るべきモデルの無いこれからの社会においては、決まった正解を早く出せる人材から、課題を自ら発見し、解決する人材の育成が求め

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

られます。2つ目は、大阪大学で学びたい意欲のある学生を獲得したいという気持ちからです。大学を良くするためには、偏差値やブランドではなく、本当に学びに意欲を持った学生を入学させなければなりません。それは一般入試のテストの点数だけではわからないと思います。最後に、世界的トップ研究大学としての責務を果たすということです。そのためには、学問の探究への情熱を持ち、社会に貢献する志を持った学生の確保が欠かせません。これらのねらいを果たすためには、テストの成績に代表される学力だけではなく、高校までの学びや活動の履歴をエビデンスとして、意欲やコンピテンシーを確認する必要があります。それが多面的・総合的な入試を取り入れる理由なのです。

よく「世界適塾入試」という名前の意味を問われますので、ここで述べておきます。冒頭に本学の教育理念として、「教養」「国際性」「デザイン力」を説明しました。「世界」は国際性に通じる言葉です。「適塾」は、幕末に福沢諭吉や大村益次郎といった先達たちが学び、教養を磨いた場所です。その後、彼らは明治維新後の日本をデザインし、その実現を牽引していきました。我々は、大阪大学で学び、世界を舞台に新しい社会をデザインするリーダーとなる人材を輩出していきたいという気持ちが大いにあります。その意味が込められているのです。

このようなねらいに対して、現状の本学で学ぶ学生はどのような意識を持っているのでしょうか。今年4月に行った新入生の意識調査で、本学で特に伸ばしたい能力は何かを選んでもらいました。一番に外国語やコミュニケーション能力があがっていますが、我々の教育が目指すリーダーシップや多様性を認識する能力などが大変低いことが目を惹きます。だからこそ、多面的・総合的な入試で、人類社会の幸福を実現する意欲を持った人材を選抜していきたいと考えています。

「世界適塾入試」でどのような選抜をするのか、基本的な考え方を説明します。この入試は学力不問ではありません。あくまでも本学で学ぶための一定以上の学力を求めます。そのため、大学入試センター試験の受験を原則として求め、一定以上の学力を担保します。また、数による影響力とインパクトを出すために270人の募集人員を定めました。出願要件や出願に当たって提出する資格や書類などは、それぞれの学部ごとに指定されています。これは各学部が求める人材がどのようなものか確認するための一定のエビデンスです。エビデンスベースの客観的な情報に加えて、面接や口頭試問を行うことでフェアネス、公平性と信頼性を確保します。また、大阪大学の高大接続・入試改革は世界適塾入試の導入で終わるわけではありません。これをさらに進めていくために、今年6月に、「高等教育・入試研究開発センター」を設置しました。このセンターは、教育改革、国際入試、入試改革部門で構成され、これからの教育と入試の在り方を研究し、各部署等と連携しながら改革を進めていきます。また、IR部門とも連携し、目指す人材の獲得状況、新しい入試による入学者を追跡し、仕組みを改善するPDCAを回していきます。

最後に今後の大阪大学の高大接続改革に対する取り組み方針を説明します。日本の教育環境に適する多面的・総合的な評価、入学者選抜の在り方は、まだ確立されているとは言えません。そのために、以下のテーマで研究・開発を行います。1つ目は多面的・総合的な評価方法の開発です。2つ目はアドミッション・オフィサーの育成プログラムの開発です。3つ目としては、多様化している高校の情報を収集し、高校生の学習状況などを公正に評価するための高校版ポートレートを整備します。最後に、高校生の学習活動のエビデンスを効率的に確認できるeポートフォリオ型ウェブ出願システムの構築です。

大阪大学は、このような活動を通じて、新しい時代の入学者選抜システムの先駆けとなっていきたいと考えています。